

1. 略歴

- 1998年3月 東京外国語大学外国語学部ロシア・東欧語学科卒業
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ文学専門分野修士課程入学
- 2000年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ文学専門分野修士課程修了
- 2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ文学専門分野博士課程進学
- 2005年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ文学専門分野博士課程単位取得満期退学
- 2005年4月 日本学術振興会特別研究員 (PD) (～2008年3月)
- 2008年8月 オックスフォード大学セントアントニーズ・カレッジ、ロシア・ユーラシア研究センター
客員研究員 (日本学術振興会 ITP の研究員として北海道大学スラブ研究センターより派遣)
(～2010年3月)
- 2008年9月 学位 博士 (文学) 取得 (東京大学)
- 2010年10月 東京大学大学院人文社会系研究科研究員 (～2012年3月)
- 2012年4月 金沢大学外国語教育研究センター (国際学類準専任) 准教授 (～2016年3月)
- 2016年4月 金沢大学国際基幹教育院 (国際学類準専任) 准教授 (～2023年9月)
- 2019年4月 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員
- 2022年8月 ハーバード大学デービス・センター客員研究員 (～2023年6月)
- 2023年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 主要業績

(1) 学位論文

「寸断されたテキスト——『静かなドン』とソヴィエト文学体制の成立」東京大学大学院人文社会系研究科、2008年9月18日、全329頁、博士 (文学)

(2) 共著書

塩川伸明・沼野充義・小松久男・松井康浩編『講座ユーラシア世界 第4巻 公共圏と親密圏』東京大学出版会、2012年9月 [執筆分担箇所 平松潤奈「顔と所有——スターリン体制下の文学にみる個人と親密圏」、43-70頁]

Гречко В., Ким С. и Нонака С. (ред.) Дальний Восток, близкая Россия: эволюция русской культуры с евразийской перспективы. Белград: Логос, июль 2015. [執筆分担箇所 Дзюнна Хирамацу, Уничтожение тела в ранней советской литературе: женщины, казаки и революционеры в «Тихом Доне», С. 167-183.] [V. グレチュコ・S. キム・野中進編『遠い東、近いロシア：ユーラシアの視点から見たロシア文化の進化』ベオグラード、ロゴス社、2015年7月 [執筆分担箇所 平松潤奈「初期ソヴィエト文学における身体の根絶：『静かなドン』における女性、コサック、革命家」(ロシア語)、167-183頁]]

浅岡善治・中嶋毅編『ロシア革命とソ連の世紀 第4巻 人間と文化の革新』岩波書店、2017年9月 [執筆分担箇所 平松潤奈「テロルから日常へ——ポスト・スターリン期の文学と社会」、235-260頁]

越野剛・高山陽子編『紅い戦争のメモリースケープ：ソ連、中国、ベトナム』北海道大学出版会、2019年5月 [執筆分担箇所 平松潤奈「記念碑の存在論——ポスト・ソヴィエト・ロシアのメモリースケープを望んで」、201-227頁]

(3) 共編著書

(共編著) 沼野充義・沼野恭子・平松潤奈・乗松亨平編『ロシア文化 55 のキーワード』ミネルヴァ書房、2021年6月、全360頁 [執筆分担箇所 平松潤奈「コサック」、36頁；「聖愚者」、68頁；「第3章概説」、70-71頁；「強制収容所」、92-95頁；「社会主義リアリズム」、184-187頁]

(4) 論文

平松潤奈「〈作者〉の自己表象とコミュニケーション——ナボコフ『賜物』をめぐる」、『ロシア語ロシア文学研究』第33号、2001年9月、65-72頁

平松潤奈「見ることの限界——アレクサンドル・ソクーロフ論」、『SLAVISTIKA』XVIII、2003年3月、167-187頁

平松潤奈「ソルジェニーツィン『煉獄のなかで』における声——言語秩序と「身体」をめぐる」、『スラヴ研究』第51号、2004年5月、321-353頁

- 平松潤奈「社会主義リアリズムとショーロホフ『静かなドン』——自然としてのコサック」、『世界文学』第100号、2004年12月、31-40頁
- 平松潤奈「ショーロホフ『静かなドン』におけるジェンダー／セクシュアリティ——根絶される女性の身体について」、『ロシア語ロシア文学研究』第38号、2006年9月、26-33頁
- 平松潤奈「スターリン主義のテキストと身体」、『「スラブ・ユーラシア学」の構築』研究報告集No.19 テキストと身体、2007年3月、12-31頁
- 平松潤奈「ミハイル・ショーロホフ『静かなドン』におけるコサック——その主体化と解体」、『「スラブ・ユーラシア学」の構築』研究報告集No.21 スラブ・ユーラシアにおける東西文化の対話と対抗 I』、2007年8月、1-16頁
- 平松潤奈「聞きとられた反語法——二枚舌とスターリン語のはざまで」、『ユリイカ』2009年1月号、205-212頁
- Дзюнна Хирамацу, 'Читатель' в советской критике: полемика о концовке «Тихого Дона»// *Тацуми Ю., Норимацу К. и Нуmano M.* (ред.). *Русская литература как социальный институт. Токийский университет, март 2011. С. 57-63.* [平松潤奈「ソヴィエト批評における『読者』:『静かなドン』の結末をめぐる論争」(ロシア語)、巽由樹子・乗松亨平・沼野充義編『社会制度としてのロシア文学』、東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室・現代文芸論研究室、2011年3月、57-63頁]
- 平松潤奈「ソ連文学のなかの『外部』について」、野中進・中村唯史編『いま、ソ連文学を読み直すとは』(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書4)、埼玉大学教養学部・文化科学研究科、2012年3月、79-88頁
- Дзюнна Хирамацу, Кибернетика и немота: «Красное Колесо» А. Солженицына в его информационном аспекте // *SLAVISTIKA*, XXXV, август 2020. С. 147-167. [平松潤奈「サイバネティクスと沈黙: A. ソルジェニーツィン『赤い車輪』の情報論的側面」(ロシア語)、『SLAVISTIKA』XXXV、2020年8月、147-167頁]
- 平松潤奈「埋葬されない帝国の記念碑——ウクライナ戦争と境界の消失」、『現代思想』2022年6月臨時増刊号、52-59頁
- 平松潤奈「痛みへのノスタルジア——アレクシエーヴィチ『セカンドハンドの時代』におけるポストソヴィエトの徴候」、『ユリイカ』、2022年7月号、165-175頁
- (5) 小論等
- 平松潤奈「ソビエト的なもの」とはなにか——現代ロシア映画論の視座によせて」、『NFC ニューズレター』第67号、東京国立近代美術館フィルムセンター、2006年6月、8頁
- 平松潤奈「ロシアで観光は可能か——未完の喪と記憶資源のゆくえ」、『ゲンロン 7』、2017年12月、154-158頁
(共著) 乗松亨平、平松潤奈、松下隆志、八木君人、上田洋子「歴史をつくりなおす——文化的基盤としてのソ連」、『ゲンロン 7』、2017年12月、44-91頁
(共著) 渋谷謙次郎、乗松亨平、畠山宗明、平松潤奈、松下隆志、八木君人、上田洋子「ポストソ連思想史関連年表」、『ゲンロン 7』、2017年12月(中綴じ)
- 沼野充義・望月哲男・池田嘉郎他編『ロシア文化事典』丸善出版、2019年10月。[執筆分担箇所 平松潤奈「ソ連文学」、348-349頁;「検閲・イソップの言葉」、368-369頁]
- Дзюнна Хирамацу, Видимый цензор в соцреализме: возвращение выгесенного тела // *Бюллетень Японской ассоциации русистов, № 52, октябрь 2020. С. 357-360.* [平松潤奈「社会主義リアリズムにおける可視的検閲官: 抑圧された身体の回帰」(ロシア語)、『ロシア語ロシア文学研究』第52号、2020年10月、357-360頁]
- 中村唯史・坂庭淳史・小椋彩編『ロシア文学からの旅: 交錯する人と言葉』ミネルヴァ書房、2022年5月 [執筆分担箇所 平松潤奈「ミハイル・ショーロホフ『静かなドン』」、98-99頁]
(共著) 平松潤奈、乗松亨平、松下隆志、東浩紀、上田洋子「座談会 帝国と国民国家のはざまで」『ゲンロン13』、2022年10月、176-226頁
(共著) 平松潤奈、乗松亨平、松下隆志、上田洋子「ポストソ連思想史関連年表(2)」『ゲンロン13』、2022年10月、227-232頁
- (6) 翻訳
- (共訳) 乗松亨平、平松潤奈訳、ミハイル・ヤンポリスキー『デーモンと迷宮: ダイアグラム・デフォルメ・ミメシス』水声社、2005年9月 [翻訳分担箇所 平松潤奈訳: 157-282, 339-372頁]
- 平松潤奈訳、ミハイル・ヤンポリスキー「隠喩・神話・事実性」、ミハイル・ヤンポリスキー『隠喩・神話・事実性: ミハイル・ヤンポリスキー日本講演集』平松潤奈、乗松亨平、畠山宗明訳、水声社、2007年5月、15-64頁
- 平松潤奈訳、ミハイル・ヤンポリスキー「身体の制度・表象・実践——ミハイル・ヤンポリスキーに聞く」(聞き手 平松潤奈・乗松亨平)、『隠喩・神話・事実性: ミハイル・ヤンポリスキー日本講演集』水声社、2007年5月、115-140頁。*『水声通信』No.11、2006年、105-113頁掲載のものを再録

平松潤奈訳、ヴァレリー・ブリューソフ「不必要な真実（モスクワ芸術座について）」、『ヨーロッパ世紀末転換期演劇論』早稲田大学演劇映像学連携研究拠点、2011年3月、4-9頁（オンライン媒体）

https://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/trans/modules/xoonips/download_file_id_7.pdf

（共訳）沼野充義、平松潤奈、中野幸男、河尾基、奈倉有里訳、アンドレイ・シニャフスキー『ソヴィエト文明の基礎』みすず書房、2013年12月〔翻訳分担箇所 平松潤奈訳：83-283頁〕

（共訳）平松潤奈、上田洋子、鴻英良訳、「1937年12月22、23、25日の国立メイエルホリド劇場劇団員全体集会上における論文『無縁の劇場』に関する討議速記録」、『ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938年問題〉』早稲田大学演劇映像学連携研究拠点、2014年3月（オンライン媒体）。〔翻訳分担箇所 平松潤奈訳：1-11頁〕

https://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/trans/modules/xoonips/download_file_id_132.pdf

平松潤奈訳、マルレーヌ・ラリュエル「運命としての空間—地理と宇宙をとおしたロシア帝国の正当化」、『ゲンロン7』、2017年12月、112-131頁

平松潤奈訳、アレクサンドル・エトキント「ハードとソフト」、『ゲンロン7』、2017年12月、159-183頁。

平松潤奈訳、イリヤ・カリーニン「魚類メランコリー学、あるいはお過去への沈潜」、『ゲンロン7』、2017年12月、184-203頁

(7) 学会・研究会発表

平松潤奈「〈作者〉の表象——ナボコフの『賜物』を読む」、日本ロシア文学会、2000年11月12日、東京外国語大学。

平松潤奈「社会主義リアリズム政策下のショーロホフ——『静かなドン』におけるコサック・自然・女性」、世界文学会、2004年2月21日、中央大学駿河台記念館

平松潤奈「『静かなドン』におけるコサック——その主体化と解体」、文科省科学研究費共同研究「スラブ・ユーラシアにおける東西文化の対話と対抗のパラダイム」冬期研究会、2006年2月18日、北海道大学

平松潤奈「ソ連文化と身体」、新潟大学人文学部研究プロジェクト「文化史・文化理論の再検討」公開研究会「テキストと身体」、2006年3月9日、新潟大学

平松潤奈「ソヴィエト文学体制の成立とその間隙——批評史のなかの『静かなドン』と『開かれた処女地』」、ロシア全体主義文化研究会、2008年3月30日、東京国際大学早稲田サテライト

Junna Hiramatsu, “Logic of Soviet Literature under Stalin: The Case of *Virgin Soil Upturned* (1932-1960)” (英語), Russian Graduate Seminar, 12 February 2009, Oxford, University of Oxford.

Junna Hiramatsu, “Mimetic Representation and Violence in Stalinist Culture: The Case of M. Sholokhov” (英語), Conference “Cultural Creation of ‘Russian Reality,’” 15 March 2009, Oxford, University of Oxford.

Junna Hiramatsu, “A Reconsideration of Soviet Censorship: The Case of *The Quiet Don*” (英語), AAASS (American Association for the Advancement of Slavic Studies) National Convention, 12 November 2009, Boston, the Marriott Copley Place.

Junna Hiramatsu, “‘Spontaneity’ as a Constituent of the Soviet Novel: A Receptive History of *The Quiet Don* in the Formative Period of Soviet Official Literature” (英語), ICCEES (International Council for Central and East European Studies) VIII World Congress, 30 July 2010, Stockholm, Stockholm City Conference Centre.

Дзюнна Хирамацу, “‘Читатель’ в советской критике (в полемике о концовке «Тихого Дона»)”, Международный симпозиум «Русская литература как социальный институт» [平松潤奈「ソヴィエト批評における「読者」(『静かなドン』の結末に関する論争) (ロシア語) 国際シンポジウム「社会制度としてのロシア文学」]、2010年12月17日、東京大学

Дзюнна Хирамацу, “Женщины в «Тихом Доне»: о представлении уничтожения тела в ранней советской литературе” [平松潤奈「『静かなドン』における女性たち：初期ソヴィエト文学における身体根絶の表象について」(ロシア語)], The 3rd East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, 28 August 2011, Beijing, Landmark Hotel.

Дзюнна Хирамацу, “Народ и медиакommunikации в «Красном Колесе»”, Международный симпозиум «Жизнь и творчество Александра Солженицына: на пути к «Красному Колесу»» [平松潤奈「『赤い車輪』における民衆とメディア・コミュニケーション」(ロシア語)、国際シンポジウム『アレクサンドル・ソルジェニーツィンの人生と著作：『赤い車輪』への道のり』]、2011年12月8日、モスクワ、ソルジェニーツィン名称ロシア亡命会館

Junna Hiramatsu, “Property and Body in Early Soviet Literature” (英語), The 4th East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, 5 September 2012, Kolkata, Maulana Abul Kalam Azad Institute of Asian Studies.

平松潤奈「文学のなかの経済」、ソビエト史研究会年次研究大会、2014年6月21日、東京外国語大学本郷サテライト

Junna Hiramatsu, “Soviet Subjects and the Negation of Money in A. Platonov’s *Chevengur*” (英語), The 6th East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, 28 June 2014, Seoul, Hankuk University of Foreign Studies.

平松潤奈 『『ソヴィエト文明の基礎』とソヴィエト文化研究の展開——ソヴィエト的言語と全体主義をめぐって』、科研費研究「ポスト・グローバル時代から見たソ連崩壊の文化史的意味に関する超域横断的研究」研究集会、2014年9月20日、名古屋ガーデンパレス

Junna Hiramatsu, “Money, Body, Language: Medium of Exchange in A. Platonov’s *Chevengur*” (英語) ICCEES (International Council for Central and East European Studies) IX World Congress, 7 August 2015, Makuhari, Kanda University of Foreign Studies.

平松潤奈 「再始動する批判的知性——ポスト・スターリン期の文学と社会」、岩波ロシア革命論集研究会、2016年6月19日、東京大学

平松潤奈 「社会主義リアリズムにおけるリアル——表象、欲望、存在」、シンポジウム「社会主義リアリズムの国際比較」、2016年12月18日、東京大学

平松潤奈 「記念碑の存在論——ポスト・ソヴィエト・ロシアのメモリースケープを望んで」、研究会「社会主義文化における記憶と記念の比較研究」、2017年7月29日、北海道大学

平松潤奈 「ドストエフスキーにおける貨幣」、日本ロシア文学会、2017年10月15日、上智大学
(共同発表) 平松潤奈、本田晃子、上田洋子 「記念碑はユートピアを記憶できるのか——共産主義建築、その過去・未来・ディストピア」2018年3月22日、ゲンロンカフェ (五反田)

Junna Hiramatsu, “Debt, Dialogue, and Emotion: Aspects of ‘Exchange’ in Dostoevsky’s Works” (英語), International symposium “Towards the Comparative Study of Emotion in Russian, German and Japanese Literature”, 8 March 2019, The University of Tokyo.

Junna Hiramatsu, “Unstable Trust: Dostoevsky’s Works in an Age of Economic Transition” (英語), The 10th East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, 30 June 2019, The University of Tokyo.

Дзюнна Хирамату, “Видимый цензор в соцреализме: возвращение вытесненного тела”, Панель “Процессы культурного строительства в России и СССР в свете работ Евгения Добренко” [平松潤奈「社会主義リアリズムにおける可視的検閲官：抑圧された身体の回帰」(ロシア語) パネル「ロシアとソ連における文化建設の過程：エヴゲニー・ドブレニコの著作に照らして」]、日本ロシア文学会、2019年10月27日、早稲田大学

平松潤奈 「ソ連強制収容所とその記憶」、ロシア文学会・日本スラヴ学研究会合同シンポジウム「記憶と創造の中の祖国・歴史・越境：ロシア・東欧における文化と変容」、2021年6月26日、オンライン開催

Junna Hiramatsu, “Melodrama as Productive Censorship: The Text of Muteness in Dostoevsky’s *Demons*” (英語), ICCEES (International Council for Central and East European Studies) X World Congress, 6 August 2021, Montreal, Concordia University (all-virtual format).

平松潤奈 「スターリン主義の主体形成——社会主義リアリズム文学と検閲をめぐって」、社会主義リアリズム文学研究会、2021年11月13日、慶應義塾大学 (オンライン参加)

(8) 受賞

2007年10月27日 日本ロシア文学会学会賞

3. 主な社会活動

(1) 非常勤講師

立教新座高等学校 (2001.4.1~2006.3.31)

東京大学教養学部 (2008.4.1~2008.9.30、2010.4.1~2012.3.31)

千葉大学文学部 (2010.4.1~2010.9.30、2011.4.1~2012.3.31)

青山学院女子短期大学 (2011.4.1~2012.3.31)

東京大学教養学部・大学院総合文化研究科 (2015.9.1~2016.3.31)

(2) 学会委員・学外活動等

日本ロシア文学会学会誌編集委員 (2015.10.1~2019.9.30、2021.10.1~現在)